秋田大学教育文化学部附属小学校　校　報

はとの子だより

No.5　令和５年７月２１日（金）発行

学校教育目標　自律　のびのび　きびきび　わくわく

自律した学び手が続々と　～第１回オープン研修会～

自作の水鉄砲を持った子が、宙に向かって勢いよく水を発射しました。狙っていたのは、細かく砕かれた発泡スチロールのかけらです。

水圧の強い水鉄砲にするべく、ペットボトルの口に粘着テープをぐるぐる巻きにした子どもたちは、教室の外に出てその出来具合を確かめていました。

そこに、細かく砕いた発泡スチロールのかけらを箱に詰めた子が、風に乗せてそれをばらまきながら、「雪みたい！」と喜びました。水鉄砲の子どもたちが狙ったのは、この雪のような発砲スチロールのかけらでした。

第１回オープン研修会で、２年Ａ組が生活科の授業を公開しました。冒頭の子どもたちの姿は、この授業の中で見た一場面です。

それぞれに、初夏に輝く水と、梅雨入りの時期特有の強い風の力を生かした楽しい遊びが成功しています。しかし、それだけでは終わらないのが、はとの子のよいところです。水と風、二つの遊びがコラボレーションできることに気付いたのです。

水鉄砲の子どもたちの遊びは、これだけにとどまらず、小山の上から流す「溶岩」遊びへと展開しました。自他の遊びをつなげて、豊かに発想を広げる創造性溢れる力に、たくさんの参観者が感心した一幕でした。

この日は、４年Ａ組の「はばたき学習」の授業も公開されました。

誰もが楽しく参加できるお祭りを企画することが、４年Ａ組の学習のねらいです。前時には、様々な屋台の出店計画を立て、学級の中でプレ出店しています。その際に、「レビュー」と称する感想や意見を書いて互いに交換しました。この日の授業では、屋台毎に「レビュー」の内容に目を通し、自分たちが企画し、出店した屋台を、より多くの人に楽しんでもらえるものにするための改善案について検討しました。

「レビュー」は、５つまで付けられる☆と、文章で構成されています。
「とても楽しかったと書いているのに、☆が３つだけなのはなぜなんだろう？」と、「レビュー」の内容に戸惑ったり、自分たちが自信をもって出店したのに、思いのほか辛口の「レビュー」をもらって悔しがったりと、様々な反応が渦巻きました。「レビュー」の書き手に、「どうして？」と理由を詳しく聞き取ろうとして、真剣に話し合う姿がたくさん見られました。
「くじびき」のお店を出したグループは、「くじびきだけだと物足りない」という「レビュー」の記述があったことについて、「射的と輪投げのどちらかにしよう」という対策を考えていました。一人の子が「輪投げだろうね、祭りだから」という一言を発したのがきっかけになって、輪投げを増やすことになりました。なぜ祭りだと射的でなくて輪投げなのか、しばらく考えましたが、どうやらその子の中で「祭り＝和風＝輪投げ」という論理が成立していたようです。
他のメンバーは、その考えを柔軟に受け止め、認めていたことが印象的でした。多様な考えに耳を傾け、折り合いを付けて話し合い、活動するしなやかさが発揮された一場面でした。

オープン研修会では、子どもたちの創造性や協調性が、至るところで発揮されていました。この姿を、９月２９日の公開研究協議会で更に質の高い学びにつなげていけるよう、教職員が一丸となって、ともに学び続けようとする意識を共有しました。

キセキの一冊を編む　～６年生修学旅行～

６年生は、６月末に修学旅行へ行きました。久々の２泊３日、県外への修学旅行です。
修学旅行のクライマックスは、２日目の自主研修活動です。旅行先の函館市内を「歴史」や「建築」「西洋文化との関わり」など、様々なテーマ別グループに分かれて、朝から夕方まで調べて歩きます。
同じようなテーマでも、そのアプローチの仕方は様々でした。五稜郭を訪れたグループはたくさんありましたが、タワーに上って俯瞰してから中を歩いたグループもあれば、中を歩いてからタワーに上ってその足跡を確認したグループもありました。その行程のわずかな違いでも、感じ方は異なっていました。

中を最初に歩いた子どもたちは、「こんなのどかなところでたくさんの人が戦いで命を落としたのか」と驚いていました。タワーから俯瞰した子どもたちは、「これだけの要塞を造ってまでして勝ちたかったのか」とその背景に思いを巡らせていました。
坂の上の教会を数々巡ったグループは、その荘厳な雰囲気に襟を正していました。脱帽して室内に入ったり、大きな声は控えたりしながら、キリストの受難とその精神について理解を深めるとともに、函館の地にこれだけの教会群が建設された経緯も知

ることができました。
　撮影禁止の聖堂内でスマートフォンを構えた外国人観光客に英語で声を掛け、撮影は禁止されている旨を教えてあげた子どもがいました。日々の学習の成果が、思わぬところで発揮されました。
　初日の自然公園散策や函館一番の名所である夜景観賞も天候に恵まれ、充実した３日間を過ごすことができました。
　修学旅行のテーマは、「キセキの一冊」でした。これは、今年度の児童会テーマ「幸せの本だな」と関連させたものです。学校生活で味わった一つ一つの「幸せ」を、一冊ずつの

　物語に例えたテーマです。６年生が修学旅行で味わった「幸せ」の「キセキ（奇蹟・軌跡）」も、学校の本棚に加えていこうという意味になります。

　３日間で経験した成功の喜びや失敗の悔しさを一冊の物語にして振り返ることで、これから卒業までのいくつかの山を越える原動力にしていくはずです。

自然と９２人が一体化する　～５年生自然体験学習～

　６年生が修学旅行から帰ってきてまもなく、５年生が自然体験学習を実施しました。
　自然と触れ合い共生することをテーマにした宿泊学習です。共生する対象は、自然だけではありません。当然、生活を共にする同じ学年の仲間たちも共生の対象です。
　自然の中では、たった一度の判断の誤りが自他の生命を脅かす原因になりかねません。各活動におけるリーダーを中心にして互いに協調し合い、よく考えて行動する必要があります。
　岩城少年自然の家に到着した初日から、活動メニューは盛り沢山でした。到着するや否や、野外炊飯による昼食づくりが始まります。

　家庭科の授業で事前にお米の炊き方を学習しただけあり、飯盒による炊飯も手際よく行うことができたグループが多かったようです。炊き立てのご飯にかけるカレーづくりも順調にこなし、いつもより数倍おいしい昼食のカレーライスを、みんなで楽しく語らいながら食べることができました。自然の家での野外炊飯で最も大変だと言える後片づけ

も、飯盒に付いた焦げまでしっかりと落としていました。金だわしによる焦げ落としが得意になったからか、他のグループの飯盒まで洗ってやるグループもありました。

野外炊飯が終わると、息をつく暇もなくポイントラリーが始まります。簡単な地図を頼りに山中に隠されたポイントを探して歩く、危険と隣合わせの活動です。勾配の厳しい急所や、足下のおぼつかない危険個所では、互いに声を掛け合ったり、手を貸したりしながら、ほとんど全てのポイントを見付けたというグループも数多くありました。

ポイントラリーの疲れを癒す間もなく、夜のキャンプファイヤーに向けたトーチづくりと、就寝場所のベッドメーキング、そしてキャンプファイヤーでは各学級のダンスや歌が披露されたスタンツなど、気が抜けないけれど楽しい活動が続きました。おかげで夜はぐっすり眠ることができたようです。

感心したのは二日目の朝です。起床時刻の６時になると、ほとんどのグループが毛布やシーツの片付けとベッドの復元を始めていたのです。出発前から活動の最中、何度も強調していた「先々を見通して行動する」ということが、目覚めてすぐに実行できる子どもたちの意識の高さに驚かされました。

最後の活動となったＰＡ（プロジェクト・アドベンチャー）は、輪になって円陣を組み、手を放すことなく円陣を裏返しにするなどのタスクを、人数や相手を変えながら達成目指して問題解決する力を高める活動です。一緒に組む仲間を臨機応変に変えていくので、判断が遅れると組む相手を見付け損ねてしまいます。そんな仲間を見付けた子どもたちは、「わたしと組もう」「こっちに入って」と声を掛け合っていました。２日間の集団行動で互いに助け合うことの心地よさを実感した子どもたちの姿が凝縮された場面でした。

いよいよ来年は、この体験を生かして修学旅行に臨みます。「どこに行きたい？何日間行きたい？その時、何を学びたい？」と解団式で問いかけると、誰もが口々に自分の願いをつぶやきました。新たな夢の実現に向けて、子どもたちの勢いは止まることがありません。

お見舞い

この度の集中豪雨で被害に遭われたご家庭の皆様に、心よりお見舞い申し上げるとともに、不安な日々を過ごした子どもたちの心が一日も早く癒えることをお祈りします。

明日から始まる夏休みが、子どもたちの心に新たな活力と希望を与えることにつながることを願っています。